
四条大橋の美女

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四条大橋の美女

【Nコード】

N2585P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

幕末の京都。夜の四条大橋に行くと美女に何処かに連れ去られるという。それを聞いた高杉晋作がそこに向かい見たものは。幕末の英傑の一人を出してみました。

第一章

四条大橋の美女

京の四条大橋においてだ。噂があがっていた。

「そこに真夜中に入るとだ」

「それは美しい女が出て来てだ」

まずはこう話される。

「そしてそこに行けば何処かに連れて行かれる」

「帰って来た者は誰もいない」

「一人もいないのだ」

こんな話になっていた。そしてだ。

夜に四条大橋に入る者はいなくなつた。尊皇だの佐幕だのそんな物騒な時代であり京は常に血生臭い騒動が起こっていたがそれでもだ。この橋に夜に入る者はいなくなっていた。

勤皇の者も夜にはそこに寄らない。それでだ。

彼等を取り締まり容赦なく斬っていた新撰組の者達も四条大橋には近寄らなかつた。局長である近藤勇もだ。部下達にこう話していた。

「あそこには近寄るな」

「美女が出るからですか」

「それでさらわれるから」

「そうだ。幸いまだ新撰組でさらわれた者はおらぬ」

近藤はまずはそれはよしとした。

「しかしだ。次はわからん」

「だからですね」

「あの橋には近寄らぬこと」

「決してですね」

「左様、近寄るな」

また言う近藤だった。

「わかったな」

「はい、わかりました」

「それでは」

壬生狼達もこうして近寄らなくなった。当然志士達でもある。だがその中でだ。それをまことかどうか思う者もいたのである。

長州藩の中でとりわけ過激なことで知られる男高杉晋作である。

彼は京にいる時にこの話を聞いてだ。そのうえで興味を持ってこう言ったのである。

「よし、それならだ」

「高杉君、まさかと思うが」

「君は」

「そうだ、僕がその四条大橋に行ってみよう」

彼は料亭での会合の時にこう言ったのである。

「そしてその女が何処に連れて行ってくれるのか確かめてくる」

「馬鹿を言え」

「そんなことをして何になる」

同志達はすぐにそれを止めた。そのうえで高杉の痩せた白い顔を見る。彼のその口から時折出て来る咳が不吉なものを感じさせる。

「本当に何処に連れて行かれるのかわからないのだぞ」

「それでもいいのか」

「構わんさ」

高杉は同志達の制止に笑って返した。

「僕はどちらにしろ長くは生きられんさ」

「だからか」

「それでだというのか」

「そうさ。死ぬのは一度。僕みたいな人間の行く場所は」

「ここからはだ。自嘲めいた声になった。

「地獄に決まっている。地獄より悪い場所があるというのかね」

「だからか」

「だから行くのか」

「そうだ、僕は行く」

また言う高杉だった。

「何、帰って来ないなら来ないでどうとでもなる」
やはり動じていない高杉だった。

「桂君がいるしな。それに」

「それに？」

「他に誰がいるというんだい？」

「伊藤君がいる」

この名前も出したのであった。

「彼はまだ若いが生きていれば必ず大きな存在になるよ」

「そうなのか？君以上にかい？」

「そうなるのかい」

「なるよ。きつとこの国を凄惨な国にしてくれるよ」

伊藤についてそうまで話す。

「それに桂君も井上君もいるしな」

「幾ら何でも君や小五郎君より上とは思えないがな」

「そう思えるのだが」

「生きていれば大きくなるさ」

ここであった。高杉は生を話した。

第二章

「きつとね。僕よりもね」

「君がそう言うのならいいが」

「なら行くのかい」

「行くぞ」

こう周りに話すのだった。

「もう決めたよ」

「そうか、じゃあどうなつてもいいんだな」

「何処に連れて行かれても」

「それでもかい」

「どうせ面白くもない世の中だしな」

高杉の目は少し遠くを見た。

「向こうの方が楽しいかも知れないしね」

「それでか」

「それもあつて行くのか」

「行くよ、それじゃあね」

こう言つてであつた。高杉は席を立つた。そしてすぐにその夜の四条大橋に向かうのであつた。

京の夜は静まり返っている。闇の中に家や店が並んでいるが今は人もおらずあるのは闇だけである。四条大橋の辺りには見回りの新撰組も近寄らず当然志士達もない。彼だけがそこに向かつていた。そしてだ。その橋に足を踏み入れた。するとであつた。

「もし」

前から女の声がしてきた。

「こちらに来られるのですか」

「うむ、そうだ」

高杉はその声に鷹揚に返した。木の橋の上には今は誰も見えない。「その通りだ」

「左様ですか。それではです」

「頼みがあるのだが」

高杉は自分の方から言うのであった。

「いいか」

「何をでしょうか」

「まずは姿を見せてくれ」

こうその女の声に告げた。

「いいか」

「姿をですか」

「君の姿は今のところ何処にも見えない」

橋にいるのは彼だけである。その他にあるのは闇だけだ。その他には何も見えはしない。それではこう言うのも彼にとっては当然だった。

「よかつたらまずは姿を見せてくれ」

「わかりました」

それに頷くとだった。高杉の目の前に黒髪の見事な美女が出て来た。切れ長の目を持っていて白い着物を着ていた。その着物は。

「死に装束か」

「そうです」

女もそのことを認める。切れ長の目はあくまで黒い。

「その通りです」

「ふむ、そうか」

「驚かれないのですか？」

「特にな。服で驚いたりはしない」

高杉はそれはないというのだ。

「しかし。その服を着て僕の前には現れるとは」

「何でしょうか」

「君は死人なのか」

彼が問うのはこのことだった。

「それとも。死霊なのか」

「そのどちらでもありません」

女は高杉の今の話は否定した。

「そうではありません」

「ふむ。死んではないのか」

「お迎えをしますが」

それはするというのである。

「つまりです。私は」

「あれか。お迎えの死神か」

高杉はここで納得した。手は悠然と組みそのうえで左手を顎に当てている。そうしてそのうえでその女の話聞いているのである。

「それなのか」

「そう思っておいて下さい」

これが女の言葉だった。

「わかりやすいですから」

「わかった。それではだ」

「はい」

「噂を聞いた」

まずはこう言うのであった。

第三章

「この橋での噂をね」

「つまり私のことですね」

「何処かに連れて行ってくれるそうだな」

「楽しみにしている笑みで女に問うた。

「それは本当かな」

「その通りです。それをお聞きになられてここまで来られたのですか」

「そうだよ。それで何処に連れて行ってくれるのかな」

「橋の向こうです」

「女はここでこう言った。

「そちらにです」

「橋の向こう？」

「はい」

「女は高杉の言葉にこくりと頷いてみせた。

「そちらにです」

「橋の向こうだったら渡ればいいだけじゃないか」

「高杉は女の言葉にいぶかしみながら返した。

「それでどうして君はそんなに勿体ぶっているんだい？」

「はい、それですが」

「どうしてなのかな」

「また女に問う。

「それも知りたいんだがね」

「来られればわかります」

「女は今はどう言うだけであつた。

「そうされればです」

「来ればだね」

「はい」

そうだという女であつた。

「それでどうされますか」

「返事はさっきしたよ」

高杉は悠然と笑つて女に述べた。

「その筈だね」

「それでは」

「うん、行かせてもらおう」

高杉は一步前に踏み出た。

「それじゃあね」

「わかりました、では」

こうしてであつた。高杉は女に案内されて橋を渡つた。橋を渡るとそこにあつたのは。彼が全く知らない場所であつた。

まず人が引く黒い車があり西洋の館が見える。人々は洋服を着ている者もいて店には舶来ガラス細工のものや葡萄酒の酒が売られていた。彼が西洋で見たものがそこには多く混ざつていた。

そしてだ。道行く人はだ。こんな話をしていた。

「よし、露西亞に勝つたな」

「うむ、まずはよかった」

「さて、これからだが」

露西亞の名前が出ていた。

「賠償金はどれだけ手に入るかな」

「清との戦争で三億だつたからな」

「じゃあ露西亞相手だと十億か」

「いや、五十億は貰わないとな」

「そうだな、割に合わないな」

「そうだな」

こんな話をしていて。そこまで聞いてだ。高杉は言つのであつた。

「露西亞に勝つただつて？」

「はい、そうです」

「日本があゝの国にかい」

高杉は自分の言葉に答える女の隣で首を傾げさせていた。

「またそれは」

「信じられませんか」

「難しいね」

そうだというのである。

「今の日本は一つにさえなっていないんだ」

「そうですね」

「それでどうして露西亜に勝てるというのだい」

こう女に対して問う。

「無理なんてものじゃないだろ。それに」

「それに？」

「何か違うな、街が」

高杉は今度は街を見て話すのだった。

「京なのかい？ここは」

「そうです。四条大橋の向こうです」

女はそこだと話す。

第四章

「ここは」

「だから僕は今京にいてね」

高杉の首はしきりに傾げさせられる。

「京の街はよく知っているんだが」

「こうした街ではないと」

「洋館があつたり葡萄酒の酒が売られていたり洋服を着ている人がいたり」

「しかもであつた。」

「鬚を結っている人もいないね」

「そうですね。確かに」

「うつん、何だこの街は」

高杉はあらためて首を捻った。

「見れば面影はあるんだが」

「ですから四条大橋の向こうの」

「何となくそうじゃないかなとは思えてきたよ」

「しかしですか」

「これが京なのか」

「ここでまた首を捻るのであつた。」

「随分違うな。それに」

「それに？」

「君はこの街のことを知っているね」

女に対して問うたのであつた。

「そうだね。知っているね」

「実はです」

女もだ。遂に話をはじめてきた。

「この街のことは知っています」

「そうか、やっぱりね」

「この街は京です」
それは間違いないという。
「京で間違いありません」
「それでも違う。これは一体」
「ここは十年後の京です」
「十年後の！？」
「そう、十年後のです」
その京だというのである。
「それがここなのです」
「何と、十年後かい」
「驚かれましたか？」
「驚いたも何も洋服があつて洋館があつて」
高杉は言うのはまずここだった。
「それに葡萄酒の酒に西洋の品もあつて鬚も刀もなくなつて」
「変わるのです、十年後に」
「そうなのか。ここまで変わるのか」
「幕府ではここまで変わりません」
女はこうも言ってきた。
「おわかりですね」
「わかるよ、それはね」
今の言葉の意味がわからない高杉ではなかった。流石に鋭い。
「そうか、僕達は成功したんだ」
「ただ。貴方はここにはです」
「いないんだね」
「それはおわかりですか」
「自分が一番よくわかつていることだよ」
笑みを浮かべた。そのうえでの返事だった。
「それはね」
「そうですか。やはり」
「さて、僕はこの時何処にいるのかな」

そのことを自分で言ってみせてだ。あらためて女に対して問うた。
「地獄かな。それとも餓鬼にでもなってるのかい？」

「いえ、貴方は地獄にはいません」

「散々悪いことをしてきたつもりなんだがね」

「人は大なり小なりですから。少なくとも貴方は邪ではありません
ので」

「だから地獄じゃないんだ」

「そうです。貴方がこの時にいる場所はです」

そこは何処か。女は高杉の顔を見ながら話す。今は二人はもうその
あまりにも変わった京を見てはいない。そのうえで話をしていた。
「社です」

「ほう、じゃあ神社に祭られているのかな」

「そうです。そこにいますので」

「そうなのか。また何でそうなったのかな」

「この国の為に戦いましたので。それでなのです」

「ふうん、僕が神社にねえ」

高杉はそれを聞いて興味深そうな声をあげた。そうしてであった。

第五章

「こつも言うのだった。」

「神様になったのかい」

「英霊です」

「ははは、僕が英霊か」

それを聞いてだ。思わず笑った高杉だった。

「そうなるとは思っていなかったよ」

「ですがなります。ただこうしたことをお伝えしてもそれをわかつてくれる人は中々おられなくて」

「そういえば僕の前に君がここに連れて来た人もいたんだね」

「そうです。ですがわかつてもらえずそしてです」

「そうした人はどうなったのかな」

「ここで見たことを忘れてもらいました」

そうしたというのである。

「それがどうも神隠しということになったようで」

「噂というのは大きくなるものだからね」

高杉はその話を聞いてまた述べた。

「どうしてもそうなるね」

「そうです。それは不本意でした」

「仕方ないよ。けれど僕はわかったよ」

「わかつてくれましたか」

「よくね。しかし」

また笑う高杉だった。そしてこの言葉を出した。

「面白いね」

「面白いですか」

「うん、面白いよ」

こう女に告げた。

「幕府は倒れてこうした世の中になってそれで僕も神社で祭られて

いるなんてね。面白いよ」

「それでなのですか」

「後少ししか生きられないけれどそれでも最後まで生きるか」

高杉は咳をした。そこから血を吐く。しかしそれでもまだ話す。

「死のうと思つたことは一度もないけれどね」

「生きて下さい、最後まで」

女も高杉にこう言う。

「それが貴方のやるべきことですから」

「僕の夢が適っているんだ、是非やらせてもらつよ」

「夢ですか」

「うん、日本が一つになって」

まずはこのことを話す。

「幕府が倒れて新しい世の中になるんだ。もう身分もなくてどんどん力をつけていくんだね」

「そうです。日本は大きく変わっていきます」

「それが僕の夢だったんだ。日本がそうなることがね」

「では」

「やらせてもらつよ」

また言う高杉だった。

「最後までね」

「わかりました。それでは」

「帰るのかい？」

「はい、帰ります」

そうするといふのであつた。

「今から。いいですね」

「わかつたよ。じゃあ帰ろうか」

「はい」

こうしてであつた。彼等は元の世界に歸つた。高杉は橋の上にいる。だがそこにいるのは彼だけでだ。女の姿は何処にもなかった。それに四条大橋の向こうはだ。今の時代のものだった。何の変わ

りもない。今の時代の街がそこにあるだけであった。

高杉はその足で同志達のところに戻った。しかし彼は何も話さなかった。

「何があつたんだい、それで」

「そのことについて一言も話さないが」

「帰つて来たのはいいにしても」

「何があつたんだ」

「別に何も」

笑つてこう返すだけの高杉だった。

「なかつたけれどね」

「そうなのか」

「じゃあ唯の噂だったのかい」

「そうみたいだね。しかし」

「しかし？」

「どうした高杉君」

「いや、若しかしたらただけれどね」

高杉は微笑んでた。同志達に述べた。

「この世の中は案外面白いのかも知れないな」

「おいおい、いつも下らないと言っているのにか」

「また随分なことを言うな」

「何となくそう思つたんだよ」

こう話すのだった。

「僕達の目指しているものが果たされるのならね」

「そうだ、その為にだ」

「やるぞ、幕府を倒すぞ」

「うん、そうしよう」

高杉は同志達のその言葉に頷いた。

「そうして。新しい時代を開こう」

「よし、何があつてもな」

「それを果たすぞ」

彼等は料亭で意気をあげていた。高杉はその中で微笑んでいた。その顔には確かな喜びがあった。これからのことに対する。

四条大橋の美女 完

2010・9・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2585p/>

四条大橋の美女

2010年12月1日22時40分発行